

活字論文になることの重み

― 濱松里美氏の近業に接して ―

一

このほど、濱松里美「室町・戦国期における後鳥羽院怨霊についての考察」〔『奈良史学』四一、二〇二四年〕に接した。同誌の編集後記（河内将芳執筆分）を見ると、「卒業論文のうち優秀論文として表彰されたものが掲載される」（一八二頁）とあって、当該論文が卒業論文であり、かつ、優秀なものであるとして表彰されたということが分かる。事実、その後、濱松は、一般向けの歴史読み物に「室町・戦国期の足利氏と水無瀬御影堂」〔『歴史研究』七二二、二〇二四年〕との文章も掲載・発表しており、その活躍ぶ

谷 口 雄 太

りが見て取れるところである。

濱松が考察した室町・戦国期（中世後期）の水無瀬神宮については、筆者もかつて検討したことがある（拙稿「京都足利氏と水無瀬神宮」佐藤博信編『中世東国の社会と文化』岩田書院、二〇一六年）。そのときに感じたのは、水無瀬神宮の研究が、中世前期の分析に偏っており、中世後期の追究は、あまりなされていないのではないか、ということだった。「水無瀬神宮文書」は、戦前の『水無瀬神宮文書』や、戦後の『島本町史』史料編などすでに翻刻・刊行されているにもかかわらず、である。したがって、「水無瀬神宮文書」と関係史料を用いて、中世後期の水無瀬神

宮について正面から論じていくことは十分に可能であり、かつ、新たな成果が大いに期待されるところである。そのため、筆者はそうした研究があらわれるだろうことを予期しており、ゆえに、濱松論考の誕生を寿ぐものである。

と同時に、先述の編集後記には、「活字論文になった以上は、大学での学びの成果として、あるいは、これからの研究の基礎として、広く批判の対象になると同時に、後からつづくものたちへの道しるべになる」(一八二頁)ともあって、活字論文になることの重みが記されている。本稿では、濱松論文を読みながら、そのことについて考えてみたい。とりわけ、本稿は、学部生や大学院生をはじめ、研究のはじまりのあたりにいる方々に向けて記したいと思う。

二

卒業論文に限らず、学術論文の常として、先行研究の成果と課題を過不足なく整理する必要がある。それは、自らの論文を研究史の流れのなかに位置付け、意義付けていくうえで、不可欠の作業である。先行研究とは何が違うのか、

その新規性を明確にするのである。

濱松論文でも、「はじめに」のなかでそれは行われている。そこでは、中世前期に比して、中世後期の水無瀬神宮研究の遅れが指摘される。そのうえで、「当該期の研究は、谷口雄太氏の永享の乱から見た京都足利氏と御影堂の關係についてのもののみで、室町・戦国期の足利氏と後鳥羽院の靈ならびに御影堂を、総括的に考察したものはない」(六七頁)とする。筆者は後鳥羽上皇の靈の話は正面から取り上げておらず、総体的追究は課題として残されていた。このことは、近年、小池勝也「鶴岡八幡宮寺新宮の成立と展開」(『仏教史学研究』六四―一、二〇二二年)も指摘する通りであり、濱松の見通しは正確であるといえるであろう。が、いささか気になるのは、まず、先行研究の整理と紹介があつさりしすぎていることである。筆者のものについても、「永享の乱から見た京都足利氏と御影堂の關係についてのもの」(六七頁)とするが、実際には、中世後期を通して、京都足利氏と水無瀬神宮の關係を述べており、タイトルも「京都足利氏と水無瀬神宮」である。紹介がやや不正確ではなからうか。

また、直接関係する論文として、先述した小池勝也「鶴

岡八幡宮寺新宮の成立と展開」もあるが、タイトルに「水無瀬」や「後鳥羽」の名前がないためか、落ちてしまっている。だが、これは濱松論文とダイレクトに関係するものである以上、言及することが望ましい。先行研究を網羅的に整理していくことは、なかなか難しい作業であると、改めて感じる。

ただ、もっとも気がかりなのは、「はじめに」の最後の文章、すなわち、「先学において全く触れられていない義晴の願文についても検討し、諸相を明らかにしていきたい」(六七頁)なる部分である。濱松は、「水無瀬神宮文書」のなかの足利義晴願文について、「先学において全く触れられていない」(六七頁)と断言しているのだが、これには疑問を感じざるをえなかった。なぜなら、濱松が挙げる筆者の論文でもそれに触れているからである。筆者だけではなく、古くは中村直勝『天皇と国史の進展』(賢文館、一九三四年)でも触れられている。中村は、「その外大永八年五月廿七日の「義晴」のものもあるけれども、それを一々列挙する事はやめよう」(四〇八頁)と、詳述は避けている。だが、筆者は、「大永八年(一五二八)の義晴願文は、近江公方義晴が堺公方足利義維(細川晴元・三好元長らに擁

立されて四国阿波から畿内に進軍。それに対し、義晴・細川高国らは近江へと動座)を「南海道凶徒」としてのその「頓伏」を折って水無瀬の神威を仰いだものであり、対同族戦争に際しての願文発給としては先例に適っており(この点、義晴・義維両者が大渡橋を隔てて対陣していたという事実は窺えず、やはり願文発給と大渡橋という土地の記憶とは切断されていたことも確認できる)、文書様式・内容ともに尊氏願文(史料4)・義教願文(史料1)・義勝願文を踏襲している。すなわち、義晴もまた、義教の時代に創られた伝統に則っていたわけである」(一七〇頁―一七一頁)と、字数を割いて、その意義を説明しているのである。ゆえに、拙稿を引用し、それを見ているはずの濱松が、「全く触れられていない」(六七頁)とするのは、不可解であり、不適切とせざるをえない。もし仮に、如上の説明が誤りだということであれば、それを正す必要はあろう。だが、その場合でも、先行研究を引用したうえで、批判を展開しなくてはならない。しかし、濱松は、「全く触れられていない」(六七頁)として、先行研究はないとする。しかも、その結論はというと、「この義晴の同族戦勝利の願文については、義教の願文を先例としたと考えられる」(八四頁)

と、筆者の示す内容と同じなのである。にもかかわらず、当該部分につき、濱松は拙稿を引用していない。全体として拙稿を挙げているにもかかわらず、である。これでは先行研究の内容を知りつつ、それを隠して利用したのではないかと思われる仕方がないし、善意で解釈したとしても、参照した先行研究の内容を見逃した、ないし、読み忘れたということになり、いずれであっても、学術論文としては致命的な欠陥であるといわざるをえない。

このようにあえて強く述べたのは、研究というものの厳しさを知ってもらいたいからであるが、同時に、実は筆者自身がかつて指摘された話でもあるからである。大学院生時代、とある場所で、筆者もまた、「〇〇については、これまで研究が全くなされてこなかった」といった言葉・内容を、某先生に話したことがある。そのとき、先生は、本当に「全く」研究されてこなかったのですか、と、穏やかではあるが、しかし厳しく問われたのである。つまり、先生は、研究が「全く」ない、「全く」触れられていないなどということはおおよそありえることではなく、何かしら研究はあり、触れられているだろうから、嘘はつかず、自分を大きく見せることなく、先行研究と誠実に向き合い、

格闘しなさい、と伝えてくれたのだと、筆者は思っている。一瞬の出来事だったので、先生はお忘れかもしれないが、以来、安易な表現の使用を控えるなど、叙述には注意するようになった。業績が求められる現在、論文を発表することは大切で、そのことは理解するが、いったん世に出たものはとりかえしが難しいものとなってしまいう以上、ここは慎重にいききたいものである。

三

「はじめに」を終えて、本論に移る。全体は二章構成で、おおむね時系列に沿って話が展開されている。史料を挙げて丁寧に説明していく王道のスタイルで、違和感なく読める。学部生としてこのレベルに達していれば、卒業論文としてかなりのものであるといえよう。

ただ、卒論を越えて、広く読まれる学術論文としてとなると、いろいろと気になることもある。いま「守護大名」という言葉を使用することの妥当性だとか（七六頁）、水無瀬家当主の人名比定に不安があるだとか（七八頁。水無瀬具兼→水無瀬季兼）、「注」の付け方がいささか不揃いだ

とか、一般向けの歴史読み物・「室町・戦国期の足利氏と水無瀬御影堂」にしたとき、なぜ、「史料中には、水無瀬家が動いたという直接的な記録はない」（六三頁）などの誤りが生じたのかだとかといった、細かな諸点はひとまず置いて（とはいえ、こうした話も一本の論文の完成度としては看過しえない話であるが）、内容に即していくつか述べたい。

はじめに、観応二年（一三五二）正月十日足利尊氏願文（「水無瀬神宮文書」）について。本文書には、建武三年（一三三六）に足利尊氏が「大渡橋陣」で新田義貞を撃退したこと、そして、観応二年にも尊氏が「同橋陣」で足利直義を撃破せんことを願っていること、が記されている。このとき、尊氏は山崎（直義は八幡）において、尊氏は山崎という場所ゆえ、水無瀬に祈願した。他方、同願文には建武三年の話も見えているが、そこでは尊氏は八幡（義貞は山崎）において、尊氏は八幡という場所ゆえ、石清水に祈願した。つまり、水無瀬にはこのとき、尊氏は祈願していない。そのため、筆者は、「したがって、建武三年に尊氏が敵方ひしめく対岸の水無瀬にも祈願していた蓋然性は限りなく低いといわざるをえない。よって、史料4〔観応二年正月十

日足利尊氏願文〕に建武年間における神宮崇拝の話が見えるのは、尊氏による「捏造」の疑いが濃厚であろう。つまり、尊氏にとって水無瀬とは、そのときたまたま近くにあったといった関係以上のものではなかったと思しく、事実、願文発給という点から見ても、それ以降、義教に至るまで、足利氏と神宮との関係は全く切れてしまっているのである（この点は次節でも確認する）」（一六四頁）と述べた（亀甲括弧内は今回補足）。

これに対して濱松は、右の拙稿をうけて、「陣の近くにあったということも考えられるが」（七一頁）「偶然近くに陣取ったから、というのも理由の一つではあるが、水無瀬に近い山崎に陣を敷くことになった尊氏にとっては、後醍醐天皇のようにみすみす御影堂を無視することはできなかった」（七一頁）とする。つまり、拙稿の内容に加えて、「足利氏による御影堂への信仰」（七一頁）も指摘する。そしてその根拠として、『後鳥羽院御霊託記』のなかの、後醍醐天皇が隠岐から還幸したとき、たまたま御影堂の前を通過したが、祈り敬うことをせず、山崎に動座したときにも、勅使を一度も派遣しなかったため、吉野へ移座することとなった、という部分を用いて、だから足利氏は水無瀬

の近くにいたとき、しっかりと祈願したのだと解釈した。これは説得的な内容ではないかと筆者には感じられ、濱松の説明は首肯できるものである。

問題は、その後である。すでに見たように、濱松は、観応二年の尊氏の願文発給の理由を、①彼が水無瀬の近くにしたことに加えて、②御影堂への信仰もあつたからだと述べたはずである。しかし、それが、論文の後半になると、なぜか、「直義との合戦の際に願文を捧げたのは、後鳥羽院に合戦における守護神的な役割を期待していたから」(七九頁)と、その理由を自らが挙げたもの(②)に限定してしまい、地理的なもの(①)を消してしまったのである。①が論述のなかで否定されたかという点、そのようなことはない。にもかかわらず、では、そもそも、①と②はどちらがメインの理由かといえば、もし仮に②ならば、尊氏は水無瀬の近くにいないくても、どこからでも願文を発給していなくてはおかしいはずである。だが、そのような事実はない。要するに、あくまでも、①近くにきたときに、②水無瀬(後鳥羽)にはしっかりと祈敬する、という話である。濱松による②の指摘は貴重だと思うが、論理的にも史実的にも①が主たる理由であることは動かない。このこ

とは、尊氏願文のなかに、「大渡橋」での再度の勝利を祈願するとあること、また、筆者も濱松も掲げる『建内記』嘉吉元年九月一日条(後述)のなかに、尊氏が淀(大渡橋)で義貞と戦ったとき、「近所」のゆえに祈念したところ、勝利したこと、その後、直義と戦ったとき、願文をおさめたところ、再び勝利したが、願文発給は「近所」のゆえかとあることからもうかがえる。要するに、「大渡橋」という具体的な場所で戦うときに尊氏から期待された「近所」の神、これこそが水無瀬なのであって、何か特別な、抽象的な守護神などではない。繰り返すが、もしそうなのであれば、尊氏はもつと願文を発給してはおかしい。

以上のように、濱松は、論文の前半、先行研究の指摘(①)に加えて、自身の発見(②)を提示したのはよかったが、①と②の関係を論理的に詰めることなく、②のほうを過大に評価してしまった結果、論文の後半、いつのまにか①を消してしまい、論文の内部で前後に不整合を生じさせた。これは、他者(先行研究・到達点)との対話を閉ざすことにつながり、同時に、自身のオリジナリティーの所在を不明瞭にすることにもつながった。他の主たる理由・可能性(①)を否定しないまま、独自の見解(②)だけで突っ走っ

た結果、後半は自説の開陳に終始してしまい、説得力を欠くものとなってしまったのは悔やまれる。

具体的にいうと、拙稿では、足利義教の時代、水無瀬が、「尊氏願文の解釈変更（大渡橋合戦での勝利という文脈から、対同族戦争での勝利という文脈へ）を図った」（一七一頁）ことを論証している。つまり、観応二年の尊氏願文は、本来、「大渡橋」での勝利という「場所」とは切り離せないものであったが、しかしそれだと、そこで戦が起こり、足利氏が山崎に陣取らない限り、願文は二度と出ないことになる。そこで水無瀬は、当該願文を、「足利直義」への勝利と解釈変更することで、対同族戦勝利の神であるとアピールし、実際に同族戦争（対足利持氏）が勃発した永享の乱時、義教に申請し、願文を獲得することに成功した。大渡橋（場）合戦勝利の神から、対同族（人）戦争勝利の神へ、という巨大な変貌である。

これに対して濱松は、右の図式・説明のうち、その全体の枠組み、および、後半の「対同族戦争」との理解は用いつつ、前半の①大渡橋（場）合戦勝利の神という部分を、否定することなく捨象する。そのうえで、それを②「合戦における守護神」（七九頁）「足利氏の守り神」（八四頁）「足

利氏に対する守護神」（八五頁）に置き換えて、そこから「同族戦勝利の守護神」（八四頁）へと変化したとする。だが、そもそも①（場の話）が否定できていないことに加えて、濱松の説明では、何がどう変化したのか、いまいちよく分からない。「合戦における守護神」（七九頁）「足利氏の守り神」（八四頁）「足利氏に対する守護神」（八五頁）と「同族戦勝利の守護神」（八四頁）は、いったい何が違うのか。後者も「合戦における守護神」（七九頁）「足利氏の守り神」（八四頁）「足利氏に対する守護神」（八五頁）なのではないのか。

先述したように、尊氏にとって水無瀬（後鳥羽）とは、「合戦における守護神」（七九頁）といった抽象的な神ではなく、「足利氏の守り神」（八四頁）といった足利氏にとって唯一特別の神でもない。そうではなく、あくまでも、「大渡橋」という具体的な場所で行うときに期待された「近所」の神であり、そして、そのうえで（濱松のいう通り）しっかりと祈敬すべき神なのである。以後も足利氏を守護する神という点では連続していくが、尊氏の時代には「大渡橋合戦」勝利の神、義教の時代以降は「対同族戦争」勝利の神、というように変貌するのである。

以上のような論理展開の欠は、実は歴史学の論文では、ときどき目にすることがある。だが、自分の発想・着想は、自分自身で徹底的に反証を考え抜いていかななくてはいいないよ、とは、筆者が学部生だったか大学院生だったかは定かではないが、某先生（先述した先生とは別の方）が、とある場所で、学生・院生に、強くおっしゃっていたことである。桜井英治もまた、その書評のなかで、「自分の研究を愛しすぎてはいけないということに尽きる」（四八頁）ということをも「最大の教訓」（四八頁）として述べていたのは記憶に新しい（同「書評 井原今朝男著『中世日本の信用経済と徳政令』『日本史研究』六五一、二〇一六年）。歴史学が科学である以上あまりにも当然のはずだが、なぜかおろそかにされがちなので注意したい。

四

続けて、『建内記』嘉吉元年九月一日条（先述）について。これは足利義教と足利義勝がそれぞれ水無瀬に願文を発給したときの様子を記したもので、「水無瀬神宮文書」とともに重要な史料である。そのため、先行研究でも使われて

きたし、筆者も用いたことがある。筆者は、同日条の当該箇所を、直接関係しない部分は中略しつつ、全文を掲げて、①から④まで四か所の傍線を引きながら、①から順番に逐次解説するというスタイルをとった。

これに対して、濱松のものはどうかというと、中略も含めて拙稿と同じ部分が掲出され、①から④まで四か所の傍線が引かれ、①から順に逐一説明するというスタイルがとられている。濱松の傍線①から④の箇所は、拙稿の傍線①から④の箇所と、ほとんど完全に一致している（濱松の傍線④が、拙稿の傍線④より、少しだけ長いという違いはあるが、それだけである）。当然ながら、その説明内容についても大きな違いが生じるということはない。しかし、かかる部分について、拙稿への言及はない（少し後には拙稿が引用されている）。このことは、どう考えるべきだろうか。濱松が拙稿を見ているのは明らかであって、当該部分についても参照・模倣するのは構わないのだが、きちんと明記すべきではなからうか。

また、筆者が、「尊氏は、八幡に在陣した建武年間には石清水に、山崎に在陣した観応年間には水無瀬に、それぞれ戦勝を祈願していたわけである。したがって、建武三年

に尊氏が敵方ひしめく対岸の水無瀬にも祈願していた蓋然性は限りなく低いといわざるをえない」(一六四頁)と述べた部分について。濱松は、建武三年、「尊氏は石清水八幡宮側で、新田義貞は山崎側である。そして、両者の間は淀川(大渡橋)が流れており、敵方ひしめく山崎側の御影堂へわざわざ祈念^{マユ}ために向かうのは現実的ではない」(七八頁)としている。内容の重複自体は論旨の展開に必要な場合は構わないのだが、「敵方ひしめく」と、表現まで一致しているのはやはり気になってしまふ。そして、この部分についても拙稿が明記されることはない。

筆者の敬愛する某先生(上述した先生方とはまた別の方)は、「注」や「付記」の情報量が凄まじいことでも知られる。とにかく圧倒的な量の先行研究の数々が書き込まれ、関係した人々の名前が列記されるのである。筆者などは一度、先生に史料集をお貸しした、というあまりにも微細な情報まで記載していただいたことがある。さすがにこれには驚いたのだが、しかし、先生の先行研究・研究者へのリスペクトを、強く、強く、感じたものである。筆者もまた、先生にならって、史料をご教示いただいた方や、貴重なアイデアを授けてくださった方の名前は、可能な限り記すよう

に努めてきた。このあたりは、研究倫理ということになる。それは、著作権法と似ているようで、いささか異なるものであり、たとえば、アイデアは著作権法では保護されないが、研究倫理では重視される。研究倫理のほうがより一層嚴格といえよう。しかし、それは法ではないため、自ら律していかななくてはならない。近年、先行研究と格闘せず、それを軽視したり、無視したりすることも、よく目にする。自らの「凄さ」をアピールしたいのだろうが、脆弱さを感じざるをえない。多くを引用することは、むしろ知的に誠実な態度であると思うのだが、いかがだろうか。

五

以上、いろいろと述べてきたが、活字論文になると、それは誇らしい反面、このように業界の住人から学術的な論文・著書・書評などで批判を受けるのが常である。これが学界の慣行であり、つまりは、濱松が学術の世界に分け入ったということの証でもある。もし仮に、掲載媒体が学術的なものでなかったならば、このような応答はしなかったであろう。たとえば、よくあるインターネット上などでの責

任なき放言に対して、学術的に反応する余地はない。学術の土俵に上がっていないからである。学術とは無縁の世界で好き勝手にやっていたればよい。わたしたちとは無関係である。これに対して、学術の舞台上上がった以上は、同じリングで格闘したり共闘したりする関係となる。先述の編集後記のなかでも、「活字論文になった以上は、大学での学びの成果として、あるいは、これからの研究の基礎として、広く批判の対象になると同時に、後からつづくものたちへの道しるべになる」(一八二頁)とあった。濱松の論文は、水無瀬や後鳥羽の研究史において、すでにしっかりと刻まれており、もはや無視してよいものではない。それゆえにこそ、きちんと応答したわけである。

活字論文になることの重み。そのことを、濱松論文の検討を通して、同時にまた、筆者の学生・院生時代の経験を通して、学部生や大学院生をはじめ、研究のはじまりのあたりにいる方々に向けて記した。かかる方々への何らかのエールやメッセージとなっていたら幸いである。

【付記】

本研究はJSPS科研費JP222K13196の助成を受けたものである。なお、文中の「某先生」であるが、一人目は藤田寛、二人目は鈴木淳、三人目は佐藤博信の各先生である。